

遠隔日本語教育の実践—淡江大学とのジョイントエデュケーションの実施と評価

東京外国語大学大学院国際日本学研究院
林俊成

目次

概要

1. はじめに
2. 授業カリキュラム
3. 評価方法およびその結果
4. まとめおよび今後の課題

概要

東京外国語大学は、遠隔教室の設立をきっかけに 2004 年により台湾淡江大学と相互に遠隔授業を開始した。それ以来十数年に亘り、授業時間中の遠隔授業の同時開催を核とした多くのリアルタイム授業活動を行ってきた。2016 年度からは、両校のジョイントエデュケーション計画により、授業時間外での本学の大学院と学部にまたがった遠隔日本語教育実習授業を開始した。本授業の目的は、インターネットを用いた日本語教育技法を習得した上で、実際の日本語学習者と対面し、日本語を教授することであり、1 学期の期間中に、4 回の接続実習を行う。授業中には、教材分析および教案作成を行い、その結果を用いてリアルタイム通信ソフトによる教育実習を実施する。教員役の学生へのフィードバックとして、毎回接続後に、学生役の学生にアンケート調査を行い、授業中にその内容の検討を行った。本論文は、この遠隔型の日本語教育プログラムの実施に際して、その内容の説明と評価結果を述べるものである。評価にあたっては、学生役の学生に ARCS モデルによる学生の動機付けおよび授業後のアンケート調査によって本授業に関する効果を測定した。

1. はじめに

1990 年代初頭からパソコンの性能が急速に向上し、ネットワークのブロードバンド化が急速に進んだ結果、個人レベルで大量のデータを取り扱うことが可能となった。その環境下で、テレビ会議システムをベースとした通信環境が普及し、国内外、距離を問わずに講師と受講者とをリアルタイムで結んで講義を行うことも容易となり、教育現場では学生同士の討論や意見公開の場として多用されるようになってきている[1][2]。こういった状況下で、筆者も学校内等の比較的安定した環境のもとで、2007 年から 2012 年までの 6 年間に、遠隔地を結ぶ双方向語学会話講義のためのカリキュラムを策定し、タスク活動を主体とする言

語学習を二カ国間で協働して行う授業を実施した[3][4]。その一方で、小林ら[5]はビデオ会議システムではなく、個人レベルで利用されている Skype を利用したに日本語教育の授業を行った。経年と共にこのコミュニケーションツールとしてインターネット環境は、さらに発展し、技術的には世界レベルで制限無く構築がなされ、こんにちの学生はその環境に育てられていることもあり、インターネットを自由に操ることができるようになった。そのため、筆者は、学生たち自身も安定としたネットワーク環境の恩恵を享受できるだけでなく、各人がこの環境を使いこなす力をも獲得してきたと考えている。

これまでは、お互いに同じ時間に授業を設定するという、リアルタイムの授業を開催してきたが[3][4]、その際に提起された問題点としては、同時開催の場合は、たとえば、一方の国の天候の異変により、教員や学生が教室にこられない事情が発生した場合には、もう一方の国の教室で授業が開催できなくなるということは、非常に大きな問題となるという点が挙げられた。その一方で、日本語教育コースの授業にとっては、教育実習は、学生にとって直接日本語学習者と接触する非常に重要な機会でもある。実習が如何に重要であるかは、大阪大学日本語日本文化教育センターのように、その場所を共同利用拠点として教育実習の場所として提供されることが必要とされることから自明である [6]。

また、日本国内の学習者よりも世界中の日本語学習者の方が存在数は極めて多く、各種の日本語教育コースでは、多くの海外での日本語教育実習が用意されている。しかし補助金を利用する形で実施され、たとえ参加費が不要となったりしたとしても、現地滞在費用などを含めれば高コスト化していると考えられる [7]。ここで筆者は、遠隔による日本語教育実習の開催により、直接海外の日本語学習者との接触が可能となり、授業時間内での同時開催ではなく、学習者同士の個別調整により、学校の設備とは関係なくより多くの学生に実習機会を提供することが可能になると考える。

ここで、筆者は授業で、教授法や教案作成の内容を教え、学生は、他の時間を利用して日本語学習者と時間を個別に調整し実習を実施する、という形で日本語教育実習授業を開催することにした。このようなタイプの授業は、募集が順調でさえあれば、様々なレベルや母語とする日本語学習者を対象とすることも可能である。

本論文は、新しい日本語教育実習授業の実施に当たって策定したカリキュラムと、実施内容について述べる。評価は、学生に ARCS 動機付けによる 5 項目の評価授業アンケートおよび授業後のアンケートを実施し、その結果を基に行った。以下、第二章では、授業内容カリキュラム、第三章は、評価方法およびその結果、第四章は、まとめおよび今後の課題を述べるものである。

2. 授業カリキュラム

本章では、授業カリキュラムの設計および授業内容について述べる。

2.1 授業内容

本授業の目的は、インターネットによる日本語教育技法を習得し、実際の日本語学習者と対面し、日本語を教えることである。教師役の学生は、1 学期を通して4回の接続実習を行う。教科書は、「情境日本語 聴・説・演練會話集 初中級篇 1」（聞いて覚える話し方 日本語生中継）[8]を利用した。本教科書は、場面や機能シラバスを中心としたタスクベースの内容であり、タスクを完成しながら学習を行うこととなる。本教科書の選定理由は、一方的な知識を伝える教授活動よりも、教える学生側のことを考えて、学習者と共にタスクを完成していくという活動を行うことで、教えるという活動のハードルを下げられると考えたことにある。各課は、下記のタスクによって構成されている。

- ① ウォーミングアップ 機能や場面とかかわる単語の学習
- ② 聞き取り練習 各課の四つの会話の内容確認
- ③ 単語リストの提示
- ④ 重要表現 機能を実現するための文法やフレーズ表現
- ⑤ 練習 ロールプレイベースの応答練習
- ⑥ ロールプレイ テーマを設定した上での自由な会話練習

上記の①、②、④のタスクはともに質問形式の内容となり、学習者が問題を解き、教師が答え合わせとその問題点と回答の内容を説明するという形で教えることになる。⑤、⑥のロールプレイは、自由な会話を想定した内容となり、学習者が会話を作って教師と会話する形となるが、今回は4回の接続としてあるため、利用する内容は、第2課「予定を変更する」、第3課「レストランで」、第4課「旅行の感想」、第5課「買い物」とした。

	授業内容	遠隔実施時期	アンケート実施時期
第一回	第2課	10/20-10/29	10/23-11/1
第二回	第3課	11/3-11/12	11/6-11/15
第三回	第4課	11/29-12/10	12/4-12/13
第四回	第5課	12/15-12/24	12/11-12/27

表1 遠隔接続時間およびアンケート実施時期

これらの内容に対して、本授業は、下記の4回の接続を行うことになる。

1. 接続練習及び既習内容の会話練習

- 表1は、実施した接続のスケジュールを示す。1回目は、機器の練習を含めたお互いの顔合わせになり、台湾の授業で学習した第2課の内容を中心に、会話練習を行うものになる。

表2 2回目で利用する教案

2 回目は、事前に用意された教案に基づいて教育実習を行うことになる。表 2 にその教案を示す。普通の教室で行われる授業の教案は、単語カードや写真の提示になるのだが、この遠隔授業の一つ大きな特徴として、全てがコンピュータ上での表示となり、マルチメディア情報である写真などは、共有画面を利用して提示することとなる。その際、利用するソフト名および内容の記述になる。また、通信ソフトによって、マイクとカメラで教師の音声と映像を送れるが、教室での授業でよく利用される教材 CD の音声情報は、そのままでは送ることはできない。その際、その音声情報はホームページ等の利用を通してインターネット上にアップロードし利用を促すか、Moodle などの LMS を利用して提示することになる。表 2 の右側で示したように、教案の部分に「URL」と表示しているのは、教科書の音声情報を載

せたホームページである。

3 回目の遠隔接続は、教師役の学生たちが 2 回目の経験を踏まえて、自分の教案を作成することになる。なお、マルチメディア情報を提示するホームページなどは、事前に用意されたものを使用する。

2.3 反転講義教材

本遠隔実習では、3 回目までは教案に基づいて教えることになるが、4 回目には、それまでに教えた経験を踏まえて、教案では説明することになっている部分を、教える部分として動画形式の教材として作成し、学習者に事前に学習してもらってからの遠隔接続になる。

本反転講義は、語学教育において、単語・文法説明などの一斉講義になりがちな内容を動画教材で作成し、授業前に学生に見て学習してもらい、接続した際には、まず、その学習した内容を確認し、内容をしっかりと把握してから活動ベースで言語応用を中心に教授するものである。そのため、教師役の学生たちに動画教材作成技法を習得してもらった上で、教材作成にあたってもらうことになる。なお、今回教える対象は、台湾の学生であるため、作成する教材に必要な部分である媒体語には中国語を利用することとした。図 1 にウォーミングアップとなる単語学習（左側）と重要表現となる文法説明（右側）の動画の一部を示す。教師役の学生が分担して教材を作成し、Moodle 上に掲載して、教材を運用することになる。



図 1 反転講義動画教材の一画面

2.4 授業後アンケート

毎回接続を行ったあと、学習者たちに授業アンケートを行い、教師役の学生たちにフィードバックすることにした。なお、学生たちの書き易さを優先し、中国語での回答も可とする旨を伝え、回収後に内容を日本語に訳したうえで、授業中に教師役の学生たちと内容を確認し、次回以降の改善の手がかりとして問題点などを把握することとした。表 3 に第 2 回接続後のアンケートの質問内容、表 4 にその内容に対する学習者の回答を日本語訳し授業中に

利用したことについての内容を示す。

淡江大学・東外大遠隔日本語教育アンケート 11月6日・11月15日第3課台湾側	
あなたの氏名： _____	日本側教師役の氏名： _____
<u>返答する際、中国語でかまいません。</u>	
問1	あなたの、今回の遠隔接続の合計時間を教えてください。 _____分
問2	今回の接続に関して、接続問題が発生したか？ 1. はい 2. いいえ 「はい」を答えた方、その状況を教えてください。 _____
問3	今回と前回とも同じ教員であり、前回の授業と比べて、状況は、どうですか？ 良し悪し共先生にフィードバックしてください。 1. よく理解できた 2. 普通 3. いまいちわからない
問4	今回、学校と同時に第三かを教えている。この遠隔授業は、学校授業で話した内容をさらに理解になったか？あるいは、学校授業で話した内容が、この授業によって更なる理解につながった。具体的に説明を _____
問5	今回は、説明を中心となった。先生の教え方について、例を挙げて、1. 理解していないところ。2. 先生の説明方法。3. 自分の理解したこと。4. この説明方法の評価。を述べてください。
問6	今回の遠隔授業、何か意見を

表3 毎回の接続後のアンケート

以下、アンケートの回答結果の一部を示す（原文ママ）。

質問：今回と前回とも同じ教員であり、前回の授業と比べて、状況は、どうですか？良し悪し共先生にフィードバックしてください。

返答1：前回よりよかった、前回は、音声ファイルに雑音があったが、この回は、スムーズだった。先生は、数頁のPPTを作成して、教科書の例文で置き換え練習を行った。非常にいいだと思った。

返答2：前回の授業と比べて、さらにスムーズになったし、インターアクションも多くなった。先生は、私たちに日本語で単語と文型を理解させる。答えられなかったら、先生は、答えられるように導いてくれた。最後、もう一度解釈する。

返答3：今回は、私の日本語の返答は前回よりスムーズになったし、CDプレーヤの再生もスムーズになる。従って、授業全体は、前回よりも非常によかった。また、私は、先生と同義単語と用法を聞くことによって、その語彙に対して、「感じる」ようになった。また、

先生は、中国語の異音字でジョークを言ってくれて、本当に面白かった。いい思い出になるわ。授業中に中国語を用いて補助することにより、曖昧な文やわからないところ共、はっきりと明確な答えをもらえ、本当に安心

この返答のフィードバックは、それによって教師役の学生たちが、その授業満足度を単純に評価されるのではなく、授業内容そのものへの細かな評価により、教師役の学生にとっては、自らの努力が報われるという、良い意味での結果につながると思われる。

授業時間		今回と前回とも同じ教員であり、前回の授業と比べて、状況は、 どうですか？ 良し悪し共先生にフィードバックしてください。
60分	老師每次都很認真，但skype通訊狀況依舊不好	先生は、毎回まじめ。但しSkype通信状況が悪い
60分	我覺得一樣好，因為老師一樣給我們自己練習的機會，對我們有 疑惑的時候也很有耐心很溫柔。	同じです。生成から同じく練習を機会を与えてくれて、わからないところ にも優しく。
120分	好	Good
60分	對於我們沒甚麼回應感覺有點尷尬	私たちの反応のなさに、ちょっと気まずい
120分	比上次更好，上次聽音檔時有些雜訊問題但這次都很順利進行!!! 然後這次老師有做幾頁PPT，課文裡幾個例句老師讓我們代換 練習我覺得很棒。	前回よりよかった。前回は、音声ファイルに雑音があったが、この回は、 スムーズだった。先生は、教員のPPTを作成して、教科書の例文で置き 換え練習を行った。非常にいいと思った。
60分	教的更仔細也更多了	更に細かく、よくなった。
60分	狀況差不多，一樣都很好，謝謝老師～	同じくらいで、同じくらいいい。先生ありがとう～
90分	這次的上課過程比上次更流暢 也有比較多互動 會先讓我們試著用日 文解釋單字和句型 說不出來時 老師會引導我們 最後會再解釋一次。 這一次課程進行了一個半鐘頭 但結束後 多和我們互動一小時 和我們 聊天 讓我們有更多開口說日語的機會。	前回の授業と比べて、さらにスムーズになったし、インターアクションも多 くなった。先生は、私たちに日本語で単語と文型を理解させる。答えられ なかったら、先生は、答えられるように導いてくれた。最後、もう一度解 釈する。今回は、授業時間が1時間ですが、その後、さらに1時間話しまし た。多くの日本語を話す機会を与えてくれた。
90分	這一次因為我的日文回答的比上次順，老師那邊的CD播放也順利運 作，所以整個課程覺得比上次順利很多，然後，我覺得聽老師說明在 地用法及(不)同義詞時，讓我更加對那個詞彙產生感受!另外，老師還 能用中文的異音字開玩笑，而且真的超好笑的，真是美好的回憶，課 程中有中文的輔助，讓模稜兩可或有不懂的時候，有得到確定答案、 理解老師的放心。	今回は、私の日本語の返答は前回よりスムーズになったし、CDプレー ヤーの再生もスムーズになる。従って、授業全体は、前回よりも非常によ くなった。また、私は、先生の同義単語と用法を聞くことによって、その語 彙に対して、「感じる」ようになった。また、先生は、中国語の異音字で ジョークを言ってくれて、本当に面白かった。いい思い出になるわ。授業 中に中国語を用いて補助することにより、曖昧な文やわからないところ 共、はっきりと明確な答えをもらえ、本当に安心
120分	老師的上課很有趣 也很仔細地告訴單字 他用簡單的方式來教日 文 沒有缺點很滿意	先生の授業は、本当に面白い。単語を詳しく教えてくれるし、簡単な方 法で日本語を教えてくれた。文句なし。満足

	今回、学校と同時に第三かを教えている。この遠隔授業は、学校授業で 話した内容をさらに理解になったか？あるいは、学校授業で話した内容 が、この授業によって更なる理解につながった。具体的に説明を
有、一些不太懂的字詞有更加瞭解	ある。わからないところがよくわかるようになった。
有、平常上課是練習課本後聽力及口說的部份，然後遠距課程則是課本前 面的部份。	ある。ふだん授業は、ほんの練習および聞き取り、話す部分。遠隔は、授業内容 になる
有	ある
有、對於一些名詞有比較了解	ある、いろんな名詞をさらに理解できた。
有更了解，在學校上課時可能有些單字沒辦法那麼仔細的一個個講但透 過遠距課程一個老師只對兩個學生上課，相對就能有更多時間問剩下那 一點點不會的單字。有些在字典上查不到第二甚至是第二個意思，透過老 師的講解更能知道日本人在生活中會如何使用那些單字。	更に理解できた。学校でも授業は、単語などを詳しく一つずつ説明できない。遠 隔では、2名しかいないので、わからない単語を聞くことができる。辞書によって、 第二や第三の意味を覚えていなかったり、先生の説明により、さらに日本人は、 生活の中はどう利用するかわかった。
更理解句型用法	更に文型の用法を理解できた。
有、上課除了課本的內容教學以外，老師也有補充單字的一些其他用法 及意思。	あります。遠隔授業は、教科書の内容以外、先生は、単語のその他の用法と意 味も説明する。
有、單字的部份，透過課程能更精確知道單字的意思，有些比較難解釋 的名詞，老師也有找圖片給我們看。	あります。単語の部分、この授業によって、さらに正確的に単語の意味を理解で きた。難しい単語の場合、図を探して、説明してくれた。
有、像是角色扮演情境時，就要想之前學過的內容拿出來用，沒想到對於 有一篇情境的情節我是誤會的，原來客人的意思是說不用這樣吃就好，而 不是好好這個給你換，因為多這一堂課，讓我得到日文老師更多的說 明然後理解，也看到了自己的不足。	あります。ロープレを行う際、前学んだものを使おうとしたら、このように状況 の中では、私の誤解であって、お客の意味は、そのままいいんだであったの に、替わろうではなかった。この授業のおかげで日本語の先生からもっと多くの 説明で理解できたし、自分の不足も見えた。

表4 アンケートによる学習者フィードバック

3. 評価方法およびその結果

本授業を評価するために、学生の学習意欲・動機付けの程度を調べるために、「ARCS 動機付けモデル」を採用した。

ARCS 動機付けモデルは、教材設計過程において動機づけの問題に取り組むことを支援するために Keler ら [9]によって提案されたもので、Attention(注意喚起)、Relevance(関連性)、Confidence(自信)、Satisfaction(満足感)の4つの要因からなる。これは、当該教育を成功に導くために、対象となる学習活動が学習者の興味を引いているか、学習者に学習内容との関連性を想起させているか、うまくできたことに自信を持たせられるか、最後に学習が成功したという満足感を得られるか、に着目して意欲的に学習に取り組ませることを目的としている。このモデルは、もともと教材を評価することを想定して提案されたものであるが、鈴木[10]は、動機づけモデルの視点からこれを授業分析に適用して、学習意欲を高めるための手段としたほか、来嶋[11]らが独学による日本語学習支援に応用した。

また、本講義の評価に当たっては、松崎（2006）らが開発した6つの調査項目を用いて、学習者たちには第1回目と第4回目の実習の後に、教師役学生には第4回目の実習終了後にアンケートを実施した。各質問の測定尺度として、「5：強くそう思う～1：全くそう思わない」の5段階評価を設定した。表5にアンケートの質問およびその結果を示し、学習者の第1回と第4回の結果に χ^2 検定を行った結果を示す。

	ARCS による調査(5点満点)	学習者	学習者	教師役
		1回目	2回目	
注意喚起	1. あなたにとってこの授業は、魅力的だった？	4.5	4.6	4.5
	2. このタイプの授業は、面白かった？	4.5	4.6	4.4
関連性	この授業では、やりがいがあった？	4.6	4.5	4.8
	この授業では、あなたのチャレンジ精神がくすぐられた？	4.1	4.2	4.3
自信	この授業によって、あなたは（日本語を教えること/日本語を話すこと）に自信をついた？	3.8	4.2*	3.9
満足感	あなたにとって、この授業で満足感をえられた？	4.4	4.5	4.4

表5 ARCS モデルによるアンケート結果

*5%有意

表5に示すとおり、学習者は、1回目終了時のアンケート結果を通して、自信を示す問5以外の評価値が4.00～4.6の間にあることから考えれば、おおむね学習者からは高い評価が得られたと言える。さらに、学習者の考えや意識をより明確にするため、第1回目と第2回目に用いた5段階尺度をここでは「肯定的」「中立」「否定的」の3段階に変更し、 χ^2 検

定を行った。結果として、問4の「日本語を話す自信」の項目に有意差が認められた。第1回目から非常に高い評価を得られた他の質問では、さらに高い評価は得られなかったが、第4回の授業で日本語を話す自信を持つことが出来たということは、非常に高い成果であったと考えられる。もちろん、あまりネイティブと話す機会のない学生たちにとって、この授業の性質である1対1あるいは、1対2といった非常に少人数かつ、ほぼ同世代の学生であるため話しやすい、という環境がこの結果に繋がったとも考えられる。教師役の学生のARCSによる評価結果も、「日本語を教える自信」の項目平均については3.9であると低めではあるが、そのほかの項目とも5点満点の平均4.3点以上の評価値であったことから考えれば、非常に高い評価であったことがわかる。

また、表6に示した台湾側学生の語学技能に対するアンケートの回答内容から見ると、文法能力とライティング能力の評価点は比較的低いものとなったが、リスニング能力、スピーキング能力および語学力の向上については4.0ポイント以上の評価点となった。本授業は、学習者たちにネイティブと対面することで、今までにないコミュニケーションする環境を提供しているため、リスニングやスピーキングに関する評価値が高くなっていることがわかるのである。一方、その回数は4回だけであるため、急激な文法力やライティング能力が向上することにはつながらない、と考えられる。このことを考慮に含めれば、評価点そのものが高いたとは言っても、これは、単に全体の評価が高いために過ぎないと考えられるのである。

項目	質問内容	評点
1	授業に熱心に参加した。	4.5
2	リスニング能力が向上した。	4.3
3	文法力が向上した。	3.8
4	日本語の語彙数が増えた。	4.2
5	スピーキング能力が向上した。	4.0
6	ライティング能力が向上した。	3.5
7	自分の語学力の向上に役に立った。	4.4

表6 学習者言語能力の授業アンケート

4. まとめ

本論文は、遠隔授業を用いた日本語教育実習の実施および、そのアンケートの回答からの評価結果とそれに関する考察を述べたものである。しかし、ここで強調しておきたいのは、ここで利用されているシステムは、本来、日本国内の教授法と大きく異なる教授法を用いている海外の日本語学習者に、直接、日本型の教授法で教えられるという点では、コスト面だけでも考えても、非常に大きいメリットがある。また、実習回数は少ないものの反転講義を

実施するなど、異なったタイプの授業方法が実施できたことについては、見いだすべき価値があったと考えられる。一部には、ネットワークの状態がよくなく繋がりにくかったという声もあったが、ハードウェア面では後退することなく常に安定化・高速化し続けるインターネットのバント幅に期待できる面もあることから、継続的な懸念事項として留意する必要はないと考えられる。また、2020 年から開始する 5G ネットワークの普及といった次なる技術革新によって、より早く、より安定するネットワークが利用可能になっていく世界において、このような授業方法のなかで用いられる実習方法もさらなる発展を遂げていくことであろう。今後は、さらに実習の回数を増やせるように授業方法を考え、それに基づいた授業を実施し、そこに組み込まれるより良い実習方法を探っていくことを予定している。

参考文献

- [1]重松 淳, 伴野 崇生(2005), “遠隔会議を取り入れた外国語教育カリキュラムの問題点”, 総合政策学ワーキングペーパーシリーズ No.99, Pp1-53, 慶応大学, ISSN 1348-8317
- [2]片岡 昇(2006), “中国語教育におけるサイバーレクチャの実施”, J メディア教育研究, Vol.3, No.1, pp27-34, ISSN:13441264
- [3] 林俊成, "中日語言教育遠距協同教學之實施及其評估", 第一屆華語文教學國際研討會暨工作坊論文集, ISDN:978-086-147-251-5, Pp.147-161, 2008 年 3 月
- [4] 林俊成, "日中遠隔協働授業における語学教育の実施とその評価", 東京外国語大学論集 第 76 号, pp.191-212, 2008 年 10 月
- [5] 小林幸江, 何美鈴(2014), “Skype を使った日本語教育の授業の試みー中国福州大学との協働実践ー”, 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 40, Pp.137-152, 2014 年
- [6] 藤平 愛美, “大学間連携による日本語教育実習のモデル形成の試み”, 阪大学日本語日本文化教育センター授業研究 (16), Pp. 23-39, 2018 年 2 月
- [7]日本語教育・教材開発・実践教育研修 共同利用拠点事業 インターンシップ, “http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/practicum/internship_outline.html, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, 2019 年 1 月 31 日確認
- [8]ボイクマン総子, 宮谷敦美, 小室リー郁子, “日本語生中継 初中級篇 1”, くろしお出版, 2017 年第 9 刷発行
- [9] Keller, J.M. (1983). Motivational design of instruction. In C.M. Reigeluth(Ed.), Instructional-design theories and models: An overview of their current status. Lawrence Erlbaum Associates, U.S.A. Pp.383-434
- [10]鈴木 克明 (1995), “魅力ある教材」設計・開発の枠組みについて: ARCS 動機づけモデルを中心に”, 教育メディア研究, Vol. 1, No.1, Pp.50-61, ISSN:13409352
- [11]来嶋洋美, 鈴木庸子(2003), “独習による日本語学習の支援ーその方策と ARCS 動機づけモデルによる評価”, 日本語教育工学会論文誌, Vol.27, No.3, pp. 347-356, ISSN:03855236

Practice of Distance Japanese Language Education - Implementation and Evaluation of Joint Education with Tamkang University (Taiwan)

In 2004, following the establishment of a remote lecture classroom, the Tokyo University of Foreign Studies began holding remote lectures with the Tamkang University. In these ten-odd years, focusing on simultaneous classes, we have carried out many real time lesson activities. Since 2016, because of both schools' joint education program, we held Japanese distance learning practical lesson classes, spanning both the graduate school and the undergraduate school of our university outside class hours. The purpose of this lesson is to study Japanese language techniques through the internet, to meet actual Japanese students and to teach Japanese. Throughout the 1st semester, there are 4 connection exercises. During the lessons, we analyze teaching materials and prepare tutorials, and use the results to conduct practical training on a real time communication software. As the role of the faculty, for feedback to the students after each connection, we held a questionnaire and examined the contents during the lesson. This manuscript explains the implementation and content of the remote Japanese language education program and describes the evaluation results. In the evaluation, the students were motivated by ARCS model students, and the questionnaire survey was conducted after the class to measure the effect of the lesson.